

ずいそう

## 平城宮跡と私

高野 浩二



昭和40年代の初頭、私は初めて平城宮跡に立ちました。まだ寒さの残る早春の朝でしたが、その時の四周の風景に、今、さだかな記憶はありません。ただ、十町四方にもおよぶ荒地というに近い広大な野原が眼前に広がり、少し離れた集落の民家と近鉄電車の架線支持柱列以外人工を感じさせるものは、ほとんど見えなかったように思います。そのような景色の中で、大仏様のおられる観光地奈良、という私のイメージが、歴史の流れの中の奈良、というものに移行しようとしていたことを、私はまだ少しも感じてはいませんでした。

ここで奈良の街を簡単にご紹介するのに替えて、私の大好きな、昔日の、尋常小学校国語読本「奈良」の一節を読んで頂きましょう。「七代七十余年の帝都として、咲く花のにはふが如しと誇りし奈良の都も、色移り香失せて年既に久し。然れども春日の社頭、朱の回廊山の緑にはえて、森厳自ら人の襟を正さしめ、東大寺の金堂は天空高くそびえて、五丈三尺の大仏一千二百年の面影を残せり。—(中略)—佐保・佐紀の連岡に北を限り、春日・高円の山山を東に、矢田山・生駒山を西にひかへて、東西四十町、南北四十五町、九条の条坊井然として、北に大内裏(平城宮)の宮殿を仰ぎ、朱雀の大路南に走り、南端に羅城門をふまへたる古の奈良の都は、そもそも如何に美しく、如何に盛んなりしぞ。」

当時の奈良の道路事業は、画期的な自動車専用道路“名阪国道”世にいう“千日道路”の事業を完遂した直後であり、道路の建設によって、わが国経済の復興、発展に寄与する、との誇りと自信に満ち溢れていました。その奈良が、引き続き与えられた課題は、国道24号バイパス建設と平城宮跡などの保護、当時としてはまだまだ耳あたらしい“開発と遺跡保護”の大テーマであったのです。

この問題は、平城宮跡は、千年来信じられていた正方形ではなく、東側に張り出し部があったという、まさに大発見、これにともなうバイパスルートの変更、との経過を辿ることになりました。しかしながら、この問題に関係した数多くの人達が、開発の側、保護の側を問わず、それぞれの立場はありながらも、誠意をもってその調和・解決に努力し、一つの結論に達し得たことは、前例をみない大きな成果であったと考えるものであります。

この中で、私たちは多くのことを学びました。その一つは、社会の価値観の変化は至って急速であること。その一つは、適切な開発を行うためには、開発に関する知識以上に、周辺の広い範囲の知識(この場合は、歴史学、考古学など)が必要不可欠であること、などなどであります。

個人の話に戻りますが、必要に迫られて、私は歴史の世界を垣間見ることになりました。幸いにして、私の学んだ旧制高等学校は、哲学的思考や文学的思考を尊重する雰囲気であったこと、私自身が理系でありながら、英・数苦手、国・漢得手、であったことなどが、この分野への、やや趣味的な入門を比較的容易にしたように思われます。古典を読み、史蹟を巡り、詩歌を口にすることが、技術に打ち込むこととはまた別の喜びとして加わりました。お蔭で、この時点後、私の土木技術者としての人生は少しずつ方向を変え出しました。まず、“開発における遺跡などへの対応”が一つのテーマになり、高齢化とともに、土木的視野に立った古代史、といったものにも、いっそう興味が増してきたように感じています。

2010年は、平城遷都1300年に当たります。奈良が都であったのは74年間ですが、ふと気が付けば、私は、それより長い80歳になっていました。その老躯を自分でいたわりながら厳冬の平城宮跡、第二次大極殿跡の壇上に立ちました。木々は大きく成長し、その上に、さきに復元された朱雀門の屋根が覗いています。近年、平城宮跡の国営公園化が図られたのも何かのご縁でありましょう。ほぼ完成し、鴟尾輝く“第一次大極殿”の前面の舗装工事には、情報化施工が導入されたと聞いています。

雲一つない快晴ではありますが、青空は少し白っぽい感じですが、正午に近い太陽のもと、西には生駒山が高く、青く、東には東大寺、興福寺の堂塔の上、冬枯れ芝の若草山も美しい。その南につづいて春日、高円、さらに南の山々が薄く霞んでゆきます。真冬にしては暖かめの風が心地よい。

“倭は 国のまほろば たたなずく 青垣 山隠れる 倭しうるはし”